『医心方』における風歯・齲歯・牙歯痛に関する考察

戸出一郎

「医心方」巻五には、歯牙疾患が治風歯痛方第五十七から治齲歯方第六十九まで、13項にわたって記載されている。これらの歯牙疾患をそれぞれ現代病名に比定することは必ずしも容易ではない。殊に風歯痛・齲歯痛・牙歯痛の三者は病態が近似し、その鑑別は困難である。しかし諸病源候論（以下「病源」）・外台秘要方（以下「外台」）にもこの三者は同様に区別され、また宋代の「太平聖恵方」にもこの病名は引きつがれている。

三者はどのような疾患でどのように違うのか、これらの点について考察してみたい。

「医心方」における病態の説明は「病源」を引用したものであるから原典によって説明する。

「病源」巻之二十九、牙歯諸病、牙歯痛候に「牙歯痛者是牙歯相引痛。牙歯是骨之所終、髄之所養。手陽明之支脉入於歯。若髄気不足、陽明脉虚、不能栄於牙歯、為風冷所傷、故疼痛也。又有蟲。食於牙歯、則歯根有孔、蟲居其間、又傳受餘歯、亦皆疼痛、此則針灸不差、傳薬蟲死乃痛止」とある。

風歯候は「手陽明之支脉入於歯。頭面有風、陽明之脉虚、風乗虚随脉流入於歯者、則令歯有風、微腫而根浮也。」

齲歯注候は「手陽明之支脉入於歯。足太陽脉有入於頰遍於歯者。其経虚、風気客之、絡搏歯間、与血気相乗、則齲腫、熱気加之、膿汁出而臭。侵食歯齲。謂之齲歯、亦日風齲。」

これにより三者を比較すれば、三者に共通する部分は、①経絡の流注は手の陽明の支脉である。②陽明脉が虚したとき風邪が侵入する。この二点である。

三者がそれぞれ異なる点は、①牙歯痛候では風に冷が加わり、歯齲注候では熱気が加わること、②風歯候では微腫し根が浮く。③歯齲注候では風が歯間部で血気と相乗じ、歯齲が腫れ、熱を持ち、排膿して臭く、歯齲は侵食される。④牙歯痛候には歯周組織の病変の記載はない。しかし

蟲に関する記述がある。蟲が牙歯を食い、歯根に孔があってその中に蟲がいる。これは他の歯にも渡って行きみな痛みだす。この場合針灸では治らない。薬をつけると蟲が死んで止痛するとある。しかし「医心方」にはこの部分は引用されていない。

歯痛の原因は「素問」には大寒（奇病論）又は寒（繆刺論）とある。「病源」では風冷となっている。風が寒を伴ったものである。

「病源」の牙歯痛候に蟲による歯牙の蠹蝕によって疼痛が起る記事があるが、これはムシバによる痛みであろう。「病源」では歯痛の原因として風冷と蟲の二つをあげている。

風歯は風邪が陽明経に入り、そのため歯周組織が少し腫れ、歯根が浮いた状態である。風は軽く昇る性質があり、人体上部、体表を侵すものであるが、この場合の症状は歯周炎であろう。

歯齲は歯槽膿瘍であろう。「病源」に蟲の記述はないが、「医心方」や「外台」の処置内容からみて、ムシバから継発したものか、又は歯周病から生じた症状であろう。いずれにしても初期の症状ではない。

上述のように現代医学的にみれば牙歯痛はムシバによる歯髄炎の痛み（歯周炎を否定できない）であり、風歯は歯周炎（歯髄炎や三叉神経痛・口内炎を否定できない）で、歯齲はムシバ又は歯周病から継発した歯槽膿瘍と思われる。三者の区別は必ずしも明確ではない。

しかし、これを東洋医学的見地に立って考察すれば三者の鑑別はより明確になるであろう。東洋医学では表裏・寒熱・虚実・経絡の変動等によって証を立てて処置をする。診断にあたっては脉診が重要である。脉は寒なれば遅、風は浮、熱は数となる。牙歯痛、風歯・歯齲はいずれも風邪による症候だから脉は浮であるが、歯齲の場合は熱が加わって浮数となる。寒邪による脉は弦・緊・遅となるが、牙歯痛の場合、弦・緊の脉はよく見るところである。

風邪に侵されると頭痛や顔面の腫脹が起るが、このような表症は風歯にも歯齲にも表れる。歯齲には血気や熱気が加わるが、本来は風邪による病症であるから風歯と相通じる点がある。これが風齲と言われるゆえんである。

上記のような不明確な点はあるが、西洋医学による説明

よりもより明瞭である。それゆえこれらの病名を西洋医学の病名に比定する場合には、よほど注意を払わなければ本来の意義を誤る恐れがあるし、またかえって文意が通じなくなることもあるので慎重な取り扱いを要するものと考える。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

『医心方』の伝写について（Ⅶ）

杉　立　義　一

『医心方』は申すまでもなく、丹波康頼が隋・唐及びそれ以前の中国書二百数部より必要条文を抽出して、その構想のもとに三十巻に分類撰述したものである。しかし現存する『医心方』三十巻（書陵部本・安政本）の中には、中国原典に由来しない文章や字句が若干含まれている。これは康頼が原撰時に挿入したものか、あるいはその後に書き加えられたものであろうが、それらを大別すると次のようになる。

一、本文中にあるもの
　1巻一の諸薬和名弟十
　2巻二の巻首の康頼撰文
　3各巻の行間および欄外にある注
　4各巻にある「今案云云」という文
二、巻末にある識語
三、背記